

## 学修成果の把握・可視化に関する包括的取り組み －フェーズ 0/Zero－

### Towards a Comprehensive Framework for Visualizing Learning Outcomes -phase 0/Zero-

たなか よしこ<sup>\*1</sup>, 加藤 利康<sup>\*1</sup>, 河住 有希子<sup>\*1</sup>  
Yoshiko TANAKA<sup>\*1</sup>, Toshiyasu KATO<sup>\*1</sup>, Yukiko KAWASUMI<sup>\*1</sup>

<sup>\*1</sup> 日本工業大学

<sup>\*1</sup>Nippon Institute of Technology

Email: y\_tanaka@nit.ac.jp

あらまし：本稿では学修成果の把握のために、大学教育の全体像を改めて整理し、それらをどうとらえ直すことができるかを検討している。それらに基づいて大学教育用システムを活用していくプロセスを報告する。

キーワード：学修ポートフォリオ，メタ認知，学修過程の評価

#### 1. 教学マネジメント指針の基本的枠組み

2020年「教学マネジメント指針」は、大学教育の質保証と継続的改善を目指す包括的枠組みを提示した。その核心は、三つのポリシー（ディプロマ DP・カリキュラム CP・アドミッション AP）の一体的策定により教育活動全体の整合性を確保し、学生の学修成果を最大化する体系的アプローチの構築にある。

従来の形式的評価から脱却し、学修成果の把握・可視化が教学マネジメントの中核として位置づけられている。これにより三つのポリシーの妥当性検証、内部質保証システムの実効性確保、社会への説明責任履行が可能となる。また、教育職員・事務職員が学生の学修状況を具体的に理解することで FD・SD 活動が促進され、組織全体の教育力向上につながる。学修成果の把握・可視化は、質保証システムの全要素を有機的に結びつける要として機能している。

#### 2. 従来の限界と新たなアプローチの必要性

従来の学修成果把握は、定期試験の点数やレポート評点といった数値化しやすい指標に依存してきた。しかし、現代社会では学生のメタ認知能力の育成が社会的要請として不可欠となっている。変化の激しい社会で継続的に学び続け、自らの思考プロセスを客観視し調整する能力こそが、真に求められる資質である。

現代社会が大学教育に求めるのは、知識の蓄積ではなく、変化に対応し実践的能力を発揮できる人材の育成である。AI が大規模知識処理において人間を上回る今日、重要なのは知識をいかに活用し、自らの学修プロセスを省察できるかという能力である。学生が自分自身の学修状況を客観的に把握し、効果的な学修戦略を選択・調整するメタ認知能力の発達は、生涯学習社会における必要不可欠な基盤となっている。

#### 3. 直接評価による能力測定とメタ認知の促進

直接評価は、学生が実際に何を学び、どのような能力を身につけたかを具体的な行動・成果物を通じて測定する手法である。特にメタ認知能力の育成という観点から、その意義は極めて大きい。

ループリック評価では、プレゼンテーションやレポートを複数観点から段階的に評価することで、学生自身が自らの能力を多次的に理解できる。学生は評価基準を事前に把握し、自己評価と他者評価を比較することで、自らの思考プロセスや課題を客観視する機会を得る。これはメタ認知能力の発達に直接的に寄与する。

パフォーマンス評価では、実習や実技において学生の作業過程と結果を観察・評価する。医学部臨床実習、工学部実験、教育学部模擬授業などにおいて、学生は理論知識の実践的活用過程を振り返り、自らの学修方略の有効性を検証する機会を得る。

ポートフォリオ評価は、学修過程における成長や変化を継続的に記録・評価する手法である。学生自身の振り返りを含めることで、メタ認知能力の発達を直接的に促進し測定できる。学修過程の可視化により、学生は自らの学修パターンや成長過程を客観的に把握し、より効果的な学修戦略を構築できるようになる。

#### 4. 間接評価による学修体験の質的把握とメタ認知の深化

間接評価は、学生自身の認識や体験を通じて学修成果を測定し、メタ認知能力の発達を支援する重要な手法である。学修行動調査では、学修時間、方法、取り組み姿勢を調査することで、学生が自らの学修プロセスを客観視し、効果的な学修方略を見つける機会を提供する。

学生満足度調査や卒業時アンケートを通じて、学生は自らの成長を俯瞰的に振り返り、学修成果を総

合的に評価する。これにより、知識・技能の習得だけでなく、学修プロセス自体への理解が深まり、メタ認知能力がさらに発達する。

卒業生調査により長期的視点から教育効果を検証することで、学生は大学教育の意義を深く理解し、生涯学習への動機を高める。このような総合的なアプローチにより、学生のメタ認知能力を基盤とした真の学修成果の把握と可視化が実現される。

## 5. 大学生における自己振り返りとメタ認知能力育成の重要性

大学生期は、青年期から成人期への移行における自己アイデンティティ確立という重要な発達課題に直面する段階である。この時期の自己振り返りは、将来の社会人として必要な基盤的能力を形成する極めて重要なプロセスとなる。

大学生は、高校までの他律的学習環境から自律的学修環境への転換点に立っている。自己振り返りを通じて、学生は自分の強みや弱み、学修傾向、興味関心を客観的に把握し、将来のキャリア選択や価値観形成の基盤を築く。多様な価値観を持つ人々と接する大学環境において、自己理解の深化は他者理解や協働能力の向上に直結し、多様化する社会に不可欠な教育的視点を提供する。

メタ認知能力とは「学習について学習する」能力であり、自分がどのように学び、考え、問題を解決しているかを客観的に把握し、必要に応じて調整する能力である。ポートフォリオ評価やルーブリック評価における自己評価の実施は、学生のメタ認知能力を段階的に向上させ、自律的学習者としての成長を促進する。

現代社会では、急速な技術革新により継続的な学習と適応が求められる。メタ認知能力を身につけた人材は、リスキングなど効果的な新しい知識・スキル習得が可能となり、組織運営においても論理的提案と建設的議論を促進し、創造性と革新性の基盤を提供する。

## 6. システム運用による実践的展開

これらの自己振り返り、メタ認知能力の育成のための可視化ツールとして学修ポートフォリオシステムを導入する。図1に示すように、DPを各科目と紐づけし、その評価に基づくグラフとして可視化する。これらは単なるデータ収集ツールではなく、学生のメタ認知能力育成と自己振り返り促進のための教育ツールとして位置づけることが重要である。

運用フレームワークは、目標設定フェーズ（学期初めの学修目標・振り返り計画設定）、学修記録フェーズ（継続的活動記録と成果物蓄積）、中間振り返りフェーズ（中間期自己評価と軌道修正）、総括評価フェーズ（学期末総合振り返りと次期計画策定）の4段階で構成される。

教学マネジメントの観点から重要なのは、システ

ムの機能的活用よりも、学生の学修成果向上と自律的学習者育成という教育目的を明確にした上で、システムをその実現手段として効果的に運用することである。これにより、学修成果の把握・可視化が真の教育改革として機能し、社会的要請に応える人材育成が実現される。

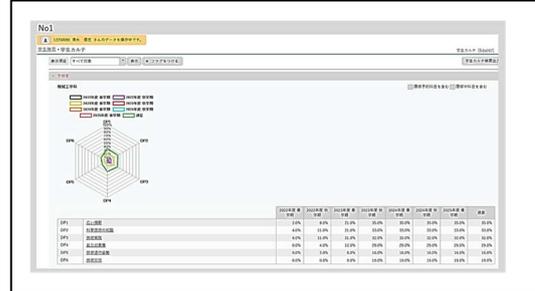


図1 GAKUEN RX 上での表示

## 7. 学内理解のための基盤作り

学修成果の把握・可視化およびメタ認知能力育成を効果的に推進するためには、学内全体での理解と協体制の構築が不可欠である。教育職員・事務職員での共通認識の形成が、改革の成功を左右する重要な要素となる。

まず、教学マネジメント指針の理念と具体的手法について、全学的なFD・SD研修を通じた理解促進が必要である。従来の評価手法からの転換に対する不安や抵抗を軽減するため、メタ認知能力育成の社会的意義と教育効果について、具体的事例を交えた説明が重要となる。特に、直接評価・間接評価の手法が単なる評価負担の増加ではなく、学生の真の成長を促進する教育実践であることを明確に示す必要がある。

学修ポートフォリオシステムの導入にあたっては、技術的操作方法だけでなく、教育的意義や運用の基本的考え方について十分な説明と研修機会の提供が求められる。各学部・学科の特性に応じた具体的な運用方法の検討と共有により、実効性のある取り組みとして定着させることが可能となる。学内全体でのコンセンサス形成を通じて、学生のメタ認知能力育成という共通目標に向けた組織的な教育改革が実現される。以上を踏まえて現在は、中等教育までの「観点別評価」の研修を企画、大学のディプロマポリシーと各学科のカリキュラムポリシーの整合性を検討した。今後、高等教育における教育工学的実践などの研修も実施することで全学的理解を得たい。

### 参考文献

- (1) 文部科学省: “教学マネジメント指針(令和2年1月22日 大学分科会)”, [https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360\\_00001.html](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1411360_00001.html) (2025年5月28日閲覧)
- (2) 日本システム技術株式会社: “GAKUEN RX ポートフォリオ”, <https://www.jast-gakuen.com/products/unipa/unipa4/> (2025年5月28日閲覧)